

日々新たに

上野直蔵

まずは、四年間の大学生活を終えられ、ご同慶の至りであります。さて、その四年間に皆さんは、何をなさり、何を得られ、どのように成長なされたか、ということは大いに問題となるのであります。思うに、私どものような老年になりますと、四年という歳月と人間的成長との相関関係はそれほど顕著ではありません。もちろん人間でありますから、精神の成長はなしとげていきます。しかし、もはや、習慣や慣れで生きてゆく度合いが多うございまして、その成長が非常に緩慢で、それと分からぬくらいです。自分という人間が、四年なら四年、五年なら五年、という歳月でいちじるしく変化した、という実感がないものですから、言いかえれば、歳月に似合う人間的变化が自覚されないものですから、いたずらに歳月の移りかわりの早さだけを思い知ります。ところが、若い人は違います。二十歳の自分は、まさに十九歳の自分ではないわけです。若い人は極言すれば一年一年、というよりも、一刻一刻に形成をとげてさえます。ですから二十歳はたった一

回こっきりのもの。惜しみて余りある二十歳の体験であります。そういうわけで、皆さんの四年間の精神生活は波乱に満ちた、すさまじい経験、発展、変化のプロセスであったことと思いますし、またそうでなくてはかなわぬところ です。

いかがでありましたでしょう。この四年間。私は皆さんのひとりひとりにたずねてまわりたいくらいであります。

どうして、こういうことをおうかがいしたりするか、というと、現代は、若者が日々ものに驚く心を大切に生きてゆく、という点では、決して好ましい社会を提供していかないからであります。あらゆるものが画一化され、規格化される。朝夕の食卓にのぼる食べものまでがそうであります。子供の玩具にしろからがそうです。先日、街を歩いていて愕然といたしました。子供が竹馬にのって興じている。その竹馬が商品としての既製品なのです。材料は存じませんが、竹でないことは一見判ります。足をのせる台は、レバーひとつで自在にあげることができるのです。私の子供の頃には竹馬は手づくりでした。荒縄でしばってつくりました。不思議に、子供たち一人一人のつくった竹馬に個性があった。こういう遊び道具の個性的工夫の中に少年の日の一刻一刻の成長が、一年ごとの精神形成が、心に顕著に刻みつけられるのです。自らの工夫と、その工夫の効果に驚く心を実感するのです。

今日からは、皆さんの大部分は、機械と技術を駆使する生産社会に送り出されます。是非はともかく、それはひとつの現実としてであります。その生産社会のつくり出すものは採算のとれるものだけです。皆さんもその採算のとれる部品として使用されるわけです。皆さんがコマ・シャル・ベースにのらなければ締め出されてしまいます。採算がとれる人間だけが有能である、というレッテルを貼られます。自己の属する社会や団体へのある程度の順応は生活の知恵でありましょうし、人間関係の保持に必要でもあります。しかし、す

くなくとも創造性のない習慣性への拒否反応だけは示してほしいと思います。いつにてもそういう、習慣的な生産のメカニズムの中で、昨日に変わらぬ今日の自分を無自覚に発見しないでいただきたい。それにはしたたかの勇気が必要とすることでしょう。効用や有能のかけで切り捨てられてしまった物や人の価値にも気づいてほしいのです。真理というものはそういう切り捨てられた少数の中に潜んでいるものなのです。そして勇気のある人のみがそれをみつけます。

画一化され、規格化された巨大な産業、情報社会の中であって、精神だけはせめてものこと醒めていて、その日その日の、その年その年の、てづくりのものであってほしいものです。

若者の生活が日々に新しくなければならぬ、ということとは、習慣や慣れ、さては惰性の生活から自由である、ということによつています。人生や社会の諸現象、学問研究、政治や文化のありよう、それらが、すべて新しい見聞であり、知識であります。十分諸事心得た練達の老齡者にとつては、それらは既知のものであり、習慣的な人間の営みとして、なんの知的好奇心や、驚きの対象ではありません。若者には、それらがすべて珍しい。たとえ習慣のつまかさねの所作であつても、若者の目にはそれはなまなましい、鮮烈な振る舞いとしてうつるでしょう。そういう目で機械的なくりかえしたる人間の営みを眺めるわけがありますから、もしそこに矛盾や、不純がありとせば、適確な感觸でそれをとらえてしまふ。明確にそれと指摘する声をあげる。さきほど私はそういう声を勇気、とうけとめました。若い人々にとつてはそういう勇気はむしろ、本能的なものである、といつてもよいでしょう。そういう本能的な勇気を失わないこと。能率万能の世に、若者なるがゆえの、人間なるがゆえの、ものに驚く心、事がらを常に新しくうけとめる心、不純な事態にはきつと声をあげる勇気をもちつづけていただきたい。そしてその若さを精神の若さとし

て、年ごとに更新していただきたいと思っております。

皆さん、そういう意味で皆さんは、「地の塩」たることを要請されています。イエスは、真の弟子が社会の道徳を純化し高める模範たるべきことを教えるのに塩のたとえを用いています。

汝らは地の塩なり、塩もし効力を失はば何をもてか之に塩すべき。後は用なし、外にすてられ人に踏まるるのみ。 (『マタイによる福音書』第五章十三節)

実にきびしいことばです。「塩もし効力を失はば」、そうです、皆さんが若者として、人間として、「もし効力を失はば」「何をもてか之」を刺激すればよろしいのでしょうか。皆さんが、「無用」のものたることはしのびがたいことです。ものに驚く心、声をあげる心を失うことを「無用のもの」と申すのであります。常に真理に目を向けましょう。いつの時代にも真理を求める人の数は少数です。少数が真理、というのではありません。真理は少数だ、というのです。そういう真理に心を動かされる姿勢が人を自由にします。そういう真理に驚く心が人を新しくします。

勇気こそ地の塩なれや梅真白

中村草田男氏の句であります。

最後に、皆さんのご健康を心から祈りつつ、皆さんの門出を祝福したいと存じます。

(同志社総長)

カナンへの孤独の旅

松山義則

卒業生諸君。入学されて以来、すでに四年間の歳月が足早にかけさりました。まことに「一寸の光陰、矢のごとし」という諺ことわざのとおりであります。諸君は長い幼年時代、少年少女時代を経て、いま、その学生生活をおわり、社会人、職業人として、また独立人としての責任をになって門出される起点に立っておられます。希望にあふれるよろこびと、同時にきびしさと緊張に身のひきしまる思いにみちておられることと存じます。

一八八四年（明治十七年）八月、同志社設立に日夜を勞された新島襄先生は、保養をかねて再度欧米へ旅立ち、イタリヤからスイスに入り、バーゼルにあるドイツ系プロテスタントの伝道館を訪ねたときのことでありました。ここには西アフリカ、インド、中国などにおくられる宣教師の家族たちが住み、その子供たちのための学校もありました。この学校の教師をしていたのは、ヘルマン・ヘッセの父、ヨハネス・ヘッセであります。新島先生はそこを訪れ、数日滞在しましたが、そのとき、七歳のヘッセは新島先生に会い強い感銘

を受けたといわれます。

一九五三年、すでに七十六歳になったヘッセをモンタニョーテに訪れたヘッセ研究家の高橋健二氏は、その著（一九七七年）のなかでつぎのように書いています。

食事中、ヘッセの一族の話が出たので、私はかねての疑問をただしたいと思った。ヘッセの母の日記に、日本のニイシマがバーゼルの伝道館に訪ねて来たことがしるされている。それは同志社の創立者新島襄にちがいないと考え、それをたしかめると、やはりそうだった。ヘッセは、「自分は七つぐらいたったが、よくおぼえている。新島が自分の会った最初の日本人だ。自分の両親は新島をかわいがっていた。ああ、七十年後の今日、自分たちが新島の話をしているのを両親が知ったら」と言い涙ぐまばかりだった。

それは、七歳のこどものヘッセと四十一歳の新島先生との一回きりの出会いでありました。年齢や人種をこえて、人間には感動ある出会いがあります。感受性あふれたヘッセは新島先生の人格に強い印象を受け、刻印づけられたことであつたであります。われわれもそれぞれの人生において、幼少のころから強烈な人格的感化をうけてきました。意識するとしなやかかわらず、人間には人と人とのふれあいの中で、自分の魂に衝撃をあたえ、自己の人格形成を決定的にするものがあります。諸君も同志社での学生生活のなかで数多くの友人、先輩に出会い、自己をさらに強力にされ、深化されてきたと信じます。

旧約の時代、モーセはイスラエルの民をひきいてエジプト脱出の旅に出ました。異国の地において、過重な労役に服していた同胞を解放し、自由の地、カナンに向かわせるために、ひるは雲の柱、よるは火の柱にみちびかれて、沙漠さばくをわたり、湖をつきすすみ、荒野のなかを歩みつづけました。敵とたたかい、飢餓にたえ、またその民の反逆にあいながらも、モーセは孤独のなかにこの難事業をなしたのであります。

わたくしたちの人生は、イスラエルの民をひきつれエジプトを出て、カナンの地に向かったモーセの生涯に似ていると思います。われわれの人生はこの世の旅であり、そこには困難と試練、故なき軽蔑と妨害がみちあふれ、われわれはそれに耐えて歩み通さねばなりません。指揮者モーセはその数多くの友人たち、イスラエルの民とともにありながら、全くの孤独のうちにあります。その旅路のなかで、モーセは自分の目ざした目標をつねに見あげ、見つめて、自己で判断をし、実行にうつし、それから生じる結果を不安をもって待つという苦しい艱難の連続でありました。諸君は自己の人生の孤独な指揮者であり、責任主体であります。

モーセがイスラエルの民をひきいて出エジプトの旅に出る以前の、彼の若き日の成長と神との出会いについて聖書はもの語っています。モーセがあつたからでありました。への難事業にたええたのは、彼には神との力づよいふれあいがあつたからでありました。へッセの新島との出会いもその一つでありました。モーセが神に出会い、へッセが新島に邂逅したのはあるいは偶然であつたと言えましょう。モーセは偉大であり、へッセは「車輪の下」、「青春は美わし」、「デミアン」にあるような感受性の人であつたからかもしれません。しかしわれわれもそれぞれの人生において、感動する人々とめぐり会い、自己の生命をゆりうごかすような力あるものと直面し、カナンへの途を歩む発動力を自己のうちにもつてあります。

卒業生諸君は、たまたま同志社に学ばれましたが、いまその一人の卒業生として力づよく旅立たれることをうれしく思います。諸君のその孤独なる人生において、たおれることなく、勇ましく歩み通してください。

神の守りがゆたかに諸君の旅路にありますよう、心から祈ります。

(同志社大学長)

無くてならぬもの

酒井 康

大学の目的は、学問の真理を探究すること、専門職業的能力を養うこと、そして幅ひろい人間の教養を形成することにあると言われます。いま大学を卒業して、社会に第一歩を踏み出そうとしていられる皆さんにとって、これから歩まれる人生が、たとえどのようなものであるとも、それぞれ大学において得られたものが、その基礎とも、土台ともなるであろうことは、疑うことができないと思います。

現代は成熟の時代、豊かさの時代であるとも言われます。昨今経済的不況をかこつ一面はあるとはいえ、概して豊かな文化生活の影響が学園生活にも色濃くあらわれていることは否定できません。このような時代に生きる若者にとって、前途は、やりたいと願って求めるならば、どんなことでもできるという可能性にみち溢あふれているかのように思えます。大学における目的の多様化現象にもあらわれているように、学生ひとりひとりが、自らのめざす目標を追求する可能性は、実に豊富にそなえられていると言っても過言ではないであります。しかし半面、ひとりの人間が一生かけて選びうる道は、またそれほど多くはありません。人間の生涯が限りあるものであってみれば、あまり欲ばりすぎて、結局

これといったものを何も獲得し得ずに、一生を終わることもないとはいえませんが。

イエスは聖書のなかで、「無くてならぬものは多くはない。いや、一つだけである。」と語っておられます。この言葉は有名なマルタとマリヤという姉妹とイエスとの出会いの物語にでてくるのですが、イエスをもてなすために、いろいろと心づかいをし、こまめに身体をうごかしているマルタが、なにもせずイエスのそばに坐って彼の言葉に耳を傾けているマリヤの態度について、イエスに不満を訴えたとき、イエスがマルタに語った言葉であります。「マリヤは良い方を選んだのだ、そしてそれは、彼女から取り去ってはならないものである。」と、イエスは結ばれるのです。

「無くてならぬものはただ一つ」という確信にみちて生きる生き方は、今日のような価値の多様化の時代、また多角的な文化社会に生きる私どもにとっては、まことに困難な、また特異な生き方と言わなければなりません。しかし、かえって今日このような時代であればあるだけに、「ただ一つのもの」、そして、「無くてならぬもの」の価値と、その発見がどれほど高価なものであるか、はかり知れないものがあります。

同志社は、創立以来、「神の言葉」を土台として、教学の伝統を築いてきた学園であります。新島襄が、教育の基礎として、キリスト教主義の原理をすえたのは、人間教育の事業が、神の真理にもとづき、神の愛により頼まなければ、不完全な、無責任なものにすぎないことを悟っておられたからであります。爾来、一〇二年の歴史を通じて、同志社は、この「無くてならぬ、ただ一つのもの」を、幾多の艱難や迫害にも耐えて、守りつづけてきました。それはまた同志社に存続の理由を賦与する、ただ一つのものでもありません。同志社人は、この「一つのもの」、すなわち神の言葉を抱いて、社会の随所に人々のところを照らす光を掲げました。また時には国家の強大な権力にも屈せず、永遠の真理と愛にのみ忠実な、自由の人を証したのです。それらの人々のなかには、世間の片隅に

ひっそりと人知れず生きた人もあったでありましょう。あるいは、家庭の主婦として、子どもたちの母親として、目だたぬ一生を終えた人もあったでありましょう。しかし「ただ一つの」真理を見いだした人にとって、それはいっさいのものを新たにすると同時に、あらゆる価値に通ずる無礙の一道を開くものでもあったと思うのです。

新島襄が十年の在米生活を終えて、懐かしい故国日本に帰着し、郷里安中に父母をたずねた時に詠んだ歌に、「故郷にかざる錦は匣のなか身にまとうべき時にあらねば」というのがあります。彼が日本脱出の前に、快風丸の船上で詠んだ、「武士の思立田の山紅葉にしきぎざればなど帰るべき」という歌と比べて、彼の心境には著しい変化があり、価値志向の根底に一大変革のあったことがあきらかに見られます。故国に帰った彼がいま身にとっているのは何か、それは言うまでもなく、イエス・キリスト、その人であります。聖書は、「キリストに合うバプテスマを受けたあなたがたは、皆キリストを着たのである」と記しています。(ガラテヤ三・二七)キリストを着るということは、古い人間の衣をかなくりすてて、永遠の生命と愛にみたまされた新しい人を身にまとうことでもあります。新島襄が、帰国後、同志社設立と、その教育の事業にささげた苦闘の生涯に見られる彼自身の姿は、まさにキリストによって装われた姿といってもよいでしょう。それは単に外見が装われることではなくて、魂の奥底においてキリストと合体するとき、内面が浄化され、外に向かつて美しい人格の光輝が放たれるということでしょう。

卒業のときに、新しい衣服を調え、盛装して新出発を祝うことを、わたしたちは慣例的に経験しますが、その新装もやがては古く色褪せる時がくることを避けることはできません。しかし、聖書の告げる、「無くてならぬもの」は、わたしたちを朽ちぬ衣によって、つねに新しく、また永遠に新しく装わせてくれることを約束しています。同志社を去られる皆さんの前途に、神のゆたかな祝福を祈ってやみません。

(同志社女子大学長)